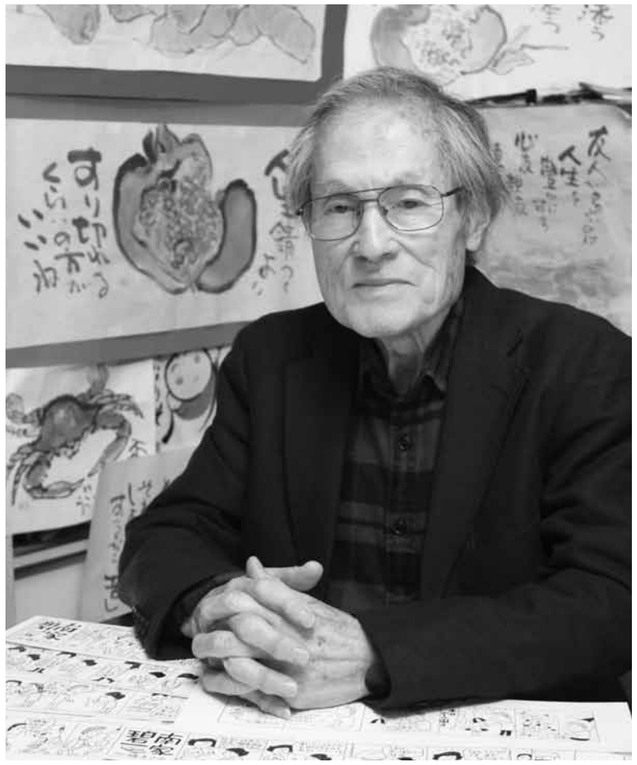
碧南一家連載50年記念特集

祝 現役連載記録日本一

加藤まさみ先生とともに 50年の歩みを振り返ります

本紙にて連載中の四こま漫画「碧南一家」が、今号で51年目を迎えます。連載50年という記録は、現在日本で連載中の漫画のなかで最長記録（連載終了作品を含めると3位）となり、まさしく偉業です。

節目を迎えたこの機会に、碧南市が誇る漫画家・加藤まさみ（本名・正巳、85歳）先生に、お話を伺いました。



●碧南一家について

碧南一家は現在、毎月1日号に掲載しているパパ、ママ、ボクの3人家族の日常がユーモアを交えて描かれる4こま漫画です。

昭和42年2月1日号から加藤先生が「碧南一家」を担当して以降、広報へきなんは月1～3回発行と変遷し、掲載頻度も月1、2回と切り替わってきました（現在は月2回発行、月1回掲載）。総掲載回数は今号をもって947回に上ります。

「広報紙には政治や宗教、下ネタは載せられないからね。そこでオチを考えるのが難しいですよ」と語る加藤先生。制約のもと、碧南市や社会に関わる題材を取り上げ、描き続けてきました。

ある時期には、市側から3月の題材は確定申告について描いてほしいと依頼があり、その状況が5年ほど続いたこともありました。「最後のほうはネタが全く浮かばなかったです。振り返ると一番大変だったのはそれかな」と苦笑い。それでも50年間、一度も締切に遅れることなく原稿を提出していただきました。心より感謝申し上げます。

長寿漫画年表（敬称略）

順位	タイトル（作者）	年数	掲載誌
1	仙人部落（小島功）	57年11か月（昭和31年10月～平成26年８月）	週刊アサヒ芸能
2	小さな恋のものがたり（みつはしちかこ）	52年４か月（昭和37年６月～平成26年９月）	美しい十代ほか
3	碧南一家（加藤まさみ）	50年１か月（昭和42年２月～）	広報へきなん
4	のらくろ（田河水泡）	50年０か月（昭和６年１月～55年12月）	少年倶楽部ほか
5	超人ロック（聖悠紀）	49年５か月（昭和42年10月～）	少年キングほか
6	タンマ君（東海林さだお）	49年２か月（昭和43年１月～）	週刊文春
7	ゴルゴ１３（さいとう・たかを）	48年４か月（昭和43年11月）	ビッグコミック

※色字は連載中の作品です。

加藤先生の幼少期からの愛読書「のらくろ」の連載記録を超え、現在も記録を更新し続けています。

●現役連載日本一

――このたびは連載50周年おめでとうございます。現役連載中の漫画としては日本一という記録について、率直な気持ちをお聞かせください。

日本一ですか。今聞いて初めて知りました(笑)。つい先日、長いことやってきたなと振り返ってみて、節目の50年が近いと気付きましたからね。

――50年という記録は目標ではなく、結果だということですね。

夢中で描き続けてきましたからね。これだけ続けてこられたのは皆さんの応援や家族の支えあってですから、感謝の気持ちでいっぱいです。

●縁から続いた碧南一家

――漫画家になるまでの経緯についてお聞かせください。

生まれは一色町（現西尾市）ですが、小中高校時代は碧南市で過ごしました。昔から絵を描くのが好きで、漫画「のらくろ」「冒険ダン吉」などを読んで育ちました。碧南高校では美術部と新聞部を兼部したりして、卒業後は碧南市内の印刷会社でデザインの仕事をしてましたね。そんなとき、当時の市役所の秘書課長さんから四こまを描いてほしいと直接依頼があったんです。

――直接ですか。それはどういった縁からでしょうか。

僕が碧南高校にいたころ、その秘書課長さんは碧南高校の教員をしてみえたんです。僕が新聞部で、紙面に挿絵や四こまを載せていたのを知っていて、声をかけてもらいました。

卒業後も働きながらも漫画のことばかり考えていて、雑誌社が主催する一こま漫画の公募企画に応募したりと、絵を描き続けていました。何度か入賞して、描くことが面白くなっていたところでした。

△入賞した自身の作品を指差す加藤先生

――最初は碧南一家ではなかったと聞いていますが。

はじめは「ホープさん」という四こまを約1年、次に「碧くんと南さん」を2年くらいで計3年くらい連載しました。そこで一旦、ほかの漫画家に代わって「碧南一家」の連載が始まったんですが、3～4年したころにその人が音信不通になっちゃったんです。市役所の職員さんが困りながら僕に電話をかけてきたのを覚えています。

碧南一家というタイトルは、ちょっと個人的に思うところはあったんですが(笑)、市民の皆さんに浸透していたということで、タイトルそのままで僕が代役をつとめ、50年間続きましたね。

△加藤先生に代わって第１回目の碧南一家（昭和42年２月１日号）

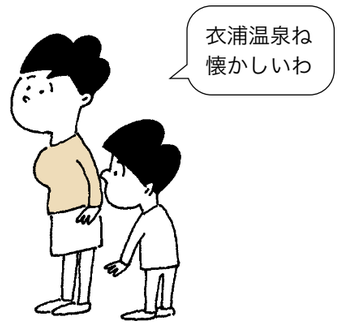
●作風のルーツ

――色んな漫画を読んでこられたということですが、先生の作風に影響を与えたものはありますか。

ありますよ。僕が一番勉強になったのは「フクちゃん」ね、横山隆一さんの。あと「サザエさん」、この2つが僕の原点です。サザエさんの作者は長谷川町子さんという女性ですから、男性にはない目線で描かれているんですよ。家庭のなかにあることとか、男の僕では気づかないような切り口で色んなネタを盛り込んでくる。いろんなヒントをもらいました。

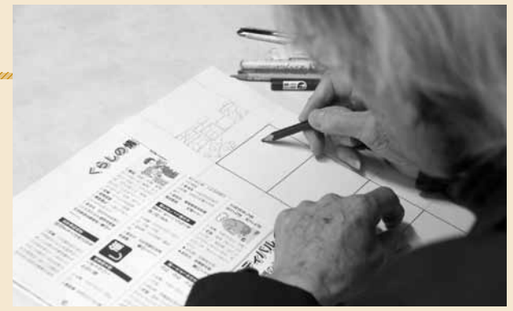
今はストーリーのある劇画ものが主流で、四こま漫画は減ってきていますが、だからこそクスッと笑える四こまを僕は大切にしたいと思います。「笑いがなければ漫画じゃない」が持論です。

△愛読書「フクちゃん」



漫画家はアイデアが命

漫画の題材は社会で話題になっていることなどの時事ネタを基本としているため、テレビや新聞から得られる情報に常に敏感でありたいと加藤先生は語ります。何時間も机で考えても構想が思い浮かばず、苦しむこともあります。そんなときは執筆をいったんやめ、日常のなかでふとアイデアが浮かんだときにいつでも記録できるよう、メモを常備しています。



碧南一家

加藤まさみ

１番のお気に入りだと話す平成12年10月１日号の掲載作品。市内に移住した外国人の子どもたちがお祭りでチャラボコをたたくという内容です。「少子化問題とチャラボコという三河の伝統芸能の国際化のつながりをうまく表せたと思う」と加藤先生。

オチがないことがオチ そんなときもありました

△平成24年11月１日号の４こま目
※市ホームページ（http://www.city.hekinan.aichi.jp/hisyojohoka/kouho/manga/manga.htm）で平成13年以降の掲載作品を公開しています。

●今後について

――今後も碧南一家を続けていただけますでしょうか。

碧南市にはずいぶんお世話になりましたからね。健康でいられるうちは続けたいです。昔に比べて握力がなくなってきて、描く線の力強さがなくなってきました。でも碧南一家の執筆は生活の一部ですから、もうやめてくれと言われない限りは(笑)。

――節目を迎えて、これからの目標はありますか。

日本最長記録はあと8年ですか（2ページ参照）。そのころは僕は93歳だからね、あと1年くらいなら何とかなるかもしれないけど、どうだろうね。記録よりもまずはこの50年を1冊にまとめたいですね。今はそれが目標です。

――今後ともよろしくお願いします。加藤先生、ありがとうございました。